(C)佐賀新聞社

ろんだん佐賀

朝長　修さん

ともながクリニック院長

ともなが・おさむ　1960年生まれ。嬉野市（旧嬉野町）出身。鹿島高―長崎大医学部卒。1987年に東京女子医科大糖尿病センターに入局、専門医として特に糖尿病性腎症、腎不全の治療に従事する。2006年、ともながクリニック糖尿病生活習慣病センター（新宿区）を開設。東京女子医科大糖尿病センター非常勤講師。東京都。

真の男女平等とは

役割分担、性差を意識せずに

男女平等に関する議論はいろんな場所で行われているかと思います。我が国では女性の管理職、代議士が少ないなどの指摘が目立ち、国別男女平等度ランキングでは156カ国中、韓国や中国より下位の120位に沈んでいるそうです。

読者の皆さんはお分かりと思いますが、1960年生まれ、佐賀県育ちの私は旧態依然とした文化の中にいました。私の両親はさほどではなかったですが、親戚の叔父様たちには強烈な男尊女卑の思い出が多々あります。座敷で飲み食いしているのは男性客ばかりで、女性陣は酒やつまみの切れ目がないように台所で作業でした。

子どもであろうが男児が冷蔵庫を開けると、恥ずかしいからやめろと怒られました。鹿島高校では、修学旅行は女子だけ、男子は残って補習です。当時、佐賀の県立高はどこも同じルールでした。どうして男は旅行に参加できないのかと教師に尋ねたところ、「わいたちは進学、就職とか都会に行くチャンスはあるやろ。女子は高校出てすぐ農家や漁師、お嫁に行ったりすっぎ一生、家から出られんかもしれん。最後に都会ば見納めに行くとさ」と。あぜんとしました。すでにそんな世の中ではなかったため、下の学年から男子も修学旅行に行ったそうです。補習をサボって殴られたのも余分な思い出ですが、この話は東京で大受けします。

長崎大学医学部は1学年120名、女子は10名以下でした。私の親族には医者が多くいますが、当時、女医さんは皆無。女の子が医学部志望なんて言ったら親戚中から反対されていました。私が卒業時、長崎大学の手術室には女子トイレも女子更衣室も存在せず、外科系は、はなから女子入局拒否でした。医学部のほぼ半数が女子となった現在では信じられないことです。

そんな私の就職先は東京女子医科大学病院です。女子医大ですから学生は全員女性です。男の医者は外の大学からの入局ですが、圧倒的に少数です。特に糖尿病センターは女医さんが多く、看護師、栄養士、事務方も女性ばかりで、環境が一転しました。私は何事も謙虚にやったつもりだったのですが、女性の指導医から態度が悪い、女をばかにした言動が気になると叱責（しっせき）されました。

女性に医者は務まらないなんて考えていましたが、どっこい、そんなことはありません。頼もしい女医さんがたくさんいました。ただ宿命なのは妊娠、出産で休まれたときは、われわれ男性が埋め合わせをします。10年経過し、埋め合わせくらいでは腹も立たなくなりました。そして驚いたことに自分が女性に囲まれていないと安心できない体質になってしまったのです。

そんなある日、尊敬する福岡の叔父から電話がありました。電話を架けるのは叔母です。私が出て、叔母に一言二言あいさつして叔父が出ます。開口一番、「何でお前が先に出るとか？電話は奥さんに取らせて、ちゃんとした用だったらお前が出ろ」と。さすが叔父さん！　忘れかかっていた「オイは男ばい」という感覚がよみがえりました。

極端な男社会から女性中心の職場に入り、順応させられた私が思うのは、医療者は男女関係なく適任がいるということです。ただ体力面では男女差はあります。全く平等、ハンディキャップなしというのは無理に実現しなくていいと思います。やっぱり役割分担、性差を意識しないことが大事な気がします。だって、男には逆立ちしたって子どもは産めないですからね。

佐賀新聞社 ※無断複製転載を禁じます。